

# 「奇跡の村」下條村・小布施町の観光振興

報告者 嶋 津 宣 美  
報告者 柴 田 正 高

- 視察先
- ・長野県下條村
- ・長野県小布施町

● 視察日程 平成26年11月17日～19日

● 視察参加者 菊地薫、腰山良悦、笠原吉範、柴田正高、嶋津宣美

## ● 『下條村』

私共一行5名は、関東ふるさと会に合わせて、長野県下のふたつの町村を視察した。

最初は少子化対策で成功している下條村、次が町の人口の100倍もの観光客が訪れる小布施町の観光をテーマに勉強した。

下條村（しもじょうむら）は長野県の南端にある人口4千人の村で、りんごや柿などの果樹生産地の中にあり、八峰町の6分の1ほどの面積の山村であるが、ここ数年全国

の市町村から注目されている。今この市町村も人口減少に悩んでいる中で、特にこれといった産業も無い中で合併ではなく自立の道を選び、逆に若者の移住促進などによって人口減少に歯止めをかけ全国一の出生率と、全国トップクラスの健全財政を保っていることから奇跡の村と言われ、私共の視察の日も大阪と山形からの視察団との一緒の研修であった。隣は飯田市で、地形的には能代市と八峰町といった距離と経済関係にある。

この村の村長さんは元自動車修理工場の経営者で、現在6期目。役場職員の意識改革に始まり、今では住民の意識まで変えたという凄い方であった。徹底的な行財政改革で財源を確保し、補助金を使わずに若者定住促進住宅の建設に充て、医療費などの軽減や教育に使い、その結果、200戸近くの入居によって人口

で葛飾北斎が度々訪れ、多くの作品を残している。昭和51年、町内に残されている北斎作品の散逸を防ぎ、収蔵・公開するための美術館が桑畑に囲まれた一隅にポツンと建てられた。ここから小布施の町づくりが始まった。



小布施ゆかりの葛飾北斎肉筆画美術館「北斎館」

の策定・「うるおいのある美しい町づくり条例」「住まいづくり相談所の改設」「広告物設置マニュアル」の発行や「生け垣づくり助成金交付要綱制定」などを次々に定め、町の景観づくりに努める。また、平成17年には東京理科大学が役場内に「町づくり研究所」を開設、23年には法政大学が「地域創造研究所」を同じく役場内に開設して町づくりの第2ステージに向けた活動をはじめている。

まさに官と民が協同して観光客を迎え入れようとする姿勢が年間115万もの人を呼び込み、105億円もの経済波及効果をもたらしている。無から有を生じさせた成功例として大いに学ぶ点が多かった。



小布施栗

● 『小布施町』  
町外から誰一人訪れる事のない信州の静かな里だった小布施町が、今年年間、町の人口（1万1千4百人）の100倍もの観光客が訪れる町になった。その秘密を探り、我が町の観光振興の一助としたいとこの思いに駆られ、賛同頂いた4名の議員と11月19日小布施町を訪れた。

小布施町は東西に5・7km、南北に4・8km、総面積は19・7平方kmの長野県で一番小さな町である。町の西側が長野市に接しているため、生

活圏は長野市に入っている。地形は東部にそびえる雁田山（標高786m）を除き、標高390～330mの平坦な地で、北西に緩やかに傾斜し平地が少ない。内陸性気候で冬と夏、昼と夜の寒暖の差が大きく、雨が少なく水はけのよい扇状地という自然条件が果物栽培を盛んにしている。特に栗が江戸時代から栽培され小布施栗は有名である。その栗を使っての和菓子作りが盛んで今では12軒の和菓子屋さんが製造販売しており、多くの雇用を生み出している。

他にブドウ・リンゴ・モモなどの栽培も盛んである。この栽培農家の頑張りが多いの観光客を町に呼び寄せている。栽培・加工・販売が早くから行われ、まさに6次産業のモデルのような町であるとの印象を受けた。また、この町は江戸後期、土地の豪商の招き